GLOBAL VOYAGE

［グローバル ヴォヤージュ］

PEACE BOAT
＊2023＊
Spring

陽光と情熱を浴びて スペインの旅

第二特集
パシフィック・ワールド号でゆく
真夏の日本一周クルーズへ

［発行］(株)ジャパングレイス

陽光と情熱を浴びて スペインの旅

ア・コルーニャ
［A Coruña］

バルセロナ
［Barcelona］

マラガ
［ Malaga ］

モトリル
［ Motril ］

世界中の観光客を惹きつけているスペイン。大西洋と地中海に面し、降りそそぐ太陽の光と青い空が迎えてくれる。フラメンコなどに代表される情熱の国でもあり伝統的なフェスタも魅力的だ。また、古くから諸外国の影響を受けて文化を育んできた背景から、世界遺産となっている建造物の数も世界トップクラスで、アートの国としても知られている。都市それぞれに特色があり、この地での楽しみは尽きない。

Passionate Spanish cruise

GLOBAL VOYAGE
2023 Spring

CONTENTS

特集
陽光と情熱を浴びて
スペインの旅 …… P3

観光三昧を満喫する
［バルセロナ］…… P4

太陽降りそそぐアンダルシア
［モトリル&マラガ］…… P6

巡礼路をゆく
［ア・コルーニャ］…… P7

新鮮素材の魅力を味わう
スペイン料理 …… P8

スペイン大使館員が語る
スペインの魅力 …… P9

第二特集
パシフィックワールド号でゆく
真夏の日本一周クルーズへ …… P10

水先案内人が語る
ピースボートクルーズの魅力 …… P12
髙野 孝子さん

PEACE BOAT ACTIVITIES …… P16

PEACE BOAT NEWS
3年ぶりのピースボートクルーズ出航式 …… P18

表紙の写真
グエル公園はガウディの作品の一つ。トカゲの噴水やお菓子の家など見どころが多く、公園からはバルセロナの街を一望できる。

観光三昧を満喫する［バルセロナ］（カタルーニャ）

サグラダ・ファミリア、グエル公園をはじめとするガウディの作品群、ローマ時代の街並みが残るゴシック地区など、数多くの観光スポットがあるバルセロナ。スペインで最も観光客が多い都市である。ピカソやダリといった芸術家たちのアートにもぜひふれたいし、ショッピングやグルメも堪能したい。バルセロナを満喫するためには計画を立てた行動がおすすめ。

1882年から現在も建設が続く「サグラダ・ファミリア」は大胆かつ複雑な建築様式でつくられ、存在感が抜群。

ヨーロッパ屈指の観光都市バルセロナ。人口は首都マドリードに次いで第2位だが、年間を通して世界各国からの旅行者であふれている。魅力的な観光スポットが数多く揃っているが、一番人気は天才建築家ガウディが遺した建築群。1882年から建設が開始され未完の傑作とされてきた「サグラダ・ファミリア」は、2026年に完成が予定されているという。このほか市内ではおとぎ話の世界のような「グエル公園」、グラシア通りに面して建つユニークな邸宅「カサ・ミラ」をはじめ「グエル邸」「カサ・ビセンス」「レイアール広場の街灯」などのガウディ作品にふれることができる。

ゴシック地区と呼ばれる旧市街は、中世の雰囲気漂う素敵な街並みで歩くだけでも楽しい。エリアのシンボルともいえるのが「サンタ・エウラリア大聖堂」で、荘厳な外観もさることながら内部にも黒いマリア像や宗教画、礼拝堂など見どころが多い。その大聖堂の先にあるのが、建物と建物の間にかかるネオゴシック洋式の「ビズベ橋」。美しい装飾がほどこされ、記念写真を撮るスポットとしても人気だ。いつも観光客で賑わっているバルセロナで一番の繁華街「ランブラス通り」はカフェやレストラン、土産物屋のほか大道芸人もいて散策するだけでわくわくさせてくれる。アート好きなら、路地の一角にある「ピカソ美術館」は必見。ピカソの少年時代から晩年までの作品を年代順に鑑賞できる。

このほかバルセロナ近郊のパワースポットであるモンセラット観光も魅力。モンセラットはかつて湖底だった場所が地殻変動で隆起した巨大な奇岩で、スペイン語で「のこぎり山」を意味している。「美は自然から学ぶ」と言ったガウディにも影響を与えたといわれている。古都ジローナは古くから戦略上の要地であり、中世の面影が色濃く残る。落ち着きある雰囲気のなかを散策するのがおすすめだ。街に流れるオニャール川沿いにカラフルな家やカテドラルが建ち並んでいる風景や、石畳の路地を歩くと目に入る歴史的建造物が心を癒してくれる。

バルセロナの繁華街「ランブラス通り」は観光客も多くショッピングも楽しめる。

4：夜は多くの店でフラメンコショーを鑑賞できる。5：市内を見下ろせる「モンジュイックの丘」は美術館や博物館などがあるカルチャースポット。6：キリスト教の聖地「モンセラット」の中腹には、黒いマリア像を祀る修道院が建てられている。

1：旧市街は中世の雰囲気ただよう街並みで風情のある路地が続く。2：旧市街の一角にある「ピカソ美術館」には約3800点もの作品が展示されている。3：街を歩くとよく見かける生ハム専門店。食べ歩きも楽しめる。

地中海をイメージしたといわれる曲線がユニークな住宅「カサ・ミラ」。

Barcelona

グエル公園のトカゲをモチーフにした小物。

お土産におすすめの革製のスリッパ。

オリーブオイルのコスメも充実。人気の石鹸は種類も豊富。

巡礼路をゆく
［ア・コルーニャ］（ガリシア）

ア・コルーニャはスペイン北西部の大西洋に面した位置にあり、ローマ時代から港湾都市として栄えてきた。キリスト教三大聖地の一つ「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」は、現在も巡礼者の拠点として知られている。巡礼路をたどりながらローマ時代の史跡めぐりを楽しみたい。

巡礼路の終着点「サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂」。

「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」は、十二使徒の一人である聖ヤコブ（スペイン語でサンティアゴ）の墓が見つかったという伝説から、9世紀以来カトリック教徒が目指す巡礼地となった。ア・コルーニャは巡礼者の拠点として多くの人々が訪れている。巡礼路を歩きながら歴史的建造物の魅力を堪能したい。なかでも中心部にあり荘厳な市庁舎がシンボルの「マリア・ピタ広場」は夜のライトアップも美しい。海沿いの窓ガラスが美しい建物が続く「マリーナ大通り」は、この街随一のフォトスポットだ。史跡めぐりなら2世紀に建設され世界最古といわれる世界遺産「ヘラクレスの塔」がおすすめ。灯台を上ると街をパノラマに見渡せる。またア・コルーニャ湾に築かれた要塞サン・アントン城も歴史を感じさせ、内部は考古博物館になっている。ローマ時代に築かれた城壁に囲まれている古都ルーゴも訪れたい世界遺産だ。街全体を囲んでいる城壁は3世紀くらいに建設されたとされ、ほぼ建築当時の姿を今に伝えている。また城壁の内側の石畳の旧市街の散策も楽しい。

1：市庁舎を中心とした広々とした「マリア・ピタ広場」は憩いの場所。2：伝説上のガリシアの建国者ブレオガン王の石像のある「ヘラクレスの塔」。3：ローマ時代に築かれた世界遺産のルーゴ市街の城壁。

聖ヤコブのモチーフであるホタテ貝のお守り、ボタフメイロなどの土産物。

A Coruña

種類豊富なサングリアも現地でぜひ飲んでみたい。

イスラム建築の最高峰といわれる職人の技術がそそがれている「アルハンブラ宮殿」。

太陽降りそそぐアンダルシア
［モトリル＆マラガ］（アンダルシア）

ヨーロッパ大陸の最南端、スペイン南部のアンダルシア州は強い陽射しが褐色の大地を照らし、エキゾチックな薫りで訪れる人を魅了する。8世紀に及んだイスラムの支配が生んだ文化芸術の数々。歴史の重みを感じさせる街並みを堪能したい。

1：四角い建物の中心部にある円形の中庭が異彩を放つルネサンス建築の傑作「カルロス5世宮殿」。2：前面に池をたたえた「貴婦人の塔」が建つ「パルタル庭園」。3：絵葉書やガイドブックでもお馴染みのアルハンブラ宮殿の夜景。

「最もスペインらしさを感じさせる」といわれる、スペイン南部のアンダルシア地方。地中海に面した寄港地モトリルから内陸へ向かうとアンダルシアを代表する街、グラナダへ到着する。古代ローマから続く歴史ある街で、特に8世紀以降、イスラム教徒によってつくられたナスル王朝が約800年続いた影響を色濃く残す。その象徴がアンダルシアの宝石と呼ばれる世界遺産「アルハンブラ宮殿」である。中に入ると、内部の天井、壁面の装飾、精緻なレリーフなどその素晴らしさに息を呑むほどだ。このほかグラナダには優美なカテドラル、サンニコラス展望台などの観光スポットがある。

マラガはコスタ・デル・ソル（太陽の海岸）の玄関口。バカンスを楽しむ人々で賑わっている。イスラム時代の要塞アルカサバを守るために高台に建てられたヒブラルファロ城からは街を一望でき、そのなかでもマラゲータ闘牛場が目を引く。歴史のある街を歩けば、ピカソの生家がありピカソ美術館では作品も鑑賞できる。またカテドラルや19世紀につくられた裁判所などの歴史的建築物も巡りたい。このほかアンダルシアの情緒あふれる白壁が輝く美しい街並みで人気の、ミハスやフリヒリアナといった近くの街に足を延ばすのもよい。

花や幾何学模様が特徴のアンダルシア地方の陶器。

アンダルシア地方は革細工が盛んで土産品も多い。

Malaga

リゾート感たっぷりのフリヒリアナの街並み。

Motril

街の守護聖人ラ・カベサをまつる「ヴァーゲン・ド・ラ・カベサ教会」。

スペイン大使館員が語る

スペインの魅力

ピースボートクルーズで訪れるスペインの寄港地の見どころやグルメなどについて、スペイン大使館職員のエドゥアルドさんに紹介してもらった。

駐日スペイン大使館　広報担当参事官
エドゥアルド・アギーレ・デ・カルセルさん

2009～2013、及び2020年より現職。マドリード出身。過去にベネズエラ（1998～2004）とトルコ（2013～2018）のスペイン大使館でも広報担当参事官を務めた。

Q ピースボートクルーズで訪れる街の特徴や魅力についてご紹介ください。

バルセロナはご存じのように世界で最も魅力的な街の一つです。1992年のオリンピックを機に大きく発展しました。ガウディ建築をはじめ見どころは多くありますが、私がおすすめしたいのは旧市街の散歩ですね。マラガは一年を通して夏のような気候でビーチがとてもキレイです。私もバケーションで訪れます。スペインではスマートシティとして知られていますが、カテドラルやローマ劇場など観光スポットも多くあります。モトリルはマラガ同様、地中海沿いの街でリゾート感が満載な一方で、イスラム文化の影響が色濃い点が特徴です。街には小さな教会が目立ちます。ア・コルーニャは大西洋に面しており、3つの街と比べたら別の世界です。小さな街ですが人口密度が高い。サンティアゴ・デ・コンポステーラが有名で、歴史ある建造物も堪能できますが、海岸沿いの遊歩道もとても美しいですよ。

Q おすすめのグルメを教えてください。

皆さんが訪れるどの街にも、美味しいパエリアとワインがありますよ（笑）。個人的におすすめしたいのは、バルセロナでは濃厚なソーセージのブティファラ、焼き野菜サラダのエスカリバダ、イカ墨のライスですね。マラガなら魚のフリット、ニンニクスープのソパ・デ・アホはいかがでしょう。モトリルはこれに加えてマンゴー、アボカドなどフルーツ類が美味しいです。スペインは魚介類の料理が知られていますが、ア・コルーニャは特に有名ですからぜひムール貝やホタテ、カニなどの海の幸を堪能してください。

Q これからクルーズに乗る方にメッセージをお願いします。

どの街も歴史も文化も素晴らしいので、寄港前にしっかり計画を立てて行動することをおすすめします。どのようなプランを立てるかは自由ですが、最高の体験ができることをお約束します。またクルーズのシーズンは春から夏なので、太陽を友だちにして素晴らしい時間をお過ごしください。

新鮮素材の魅力を味わう

スペイン料理

海の幸、山の幸を生かしたスペイン料理は、世界各地で愛され日本でも馴染みが深い。2010年には地中海料理としてユネスコの無形文化遺産に登録された。地域によって調理方法は少しずつ異なるが、ピンチョスなどの小皿料理から焼きもの、煮込み料理、スイーツまで幅広いラインアップで楽しませてくれる。訪れる街で、ぜひ本場の味を堪能したい。

●パエリア

取っ手がついた平たい鍋で、たっぷりの具材を炒めて米とサフランを加えて炊き上げる。

●サルスエラ

シーフード好きにおすすめの逸品。新鮮なエビ、ほたて、ムール貝など魚介をトマトスープで煮込んで作る。

●スパニッシュオムレツ

具にジャガイモを使う卵料理。円形に焼かれ、食事やおつまみ、サンドイッチにしても美味しい。

●ムール貝の白ワイン蒸し

スペインバルの定番ともいえる料理。本場、地中海のムール貝のプリッとした食感と甘みを堪能したい。

●ラボ・デ・トロ

牛テールをワインやドライフルーツとともに長時間煮込むため、口のなかでとけるほどの柔らかさが絶品。

●ガスパチョ

アンダルシア発祥の冷製スープ。野菜類とニンニクなどをミキサーにかけオリーブオイルとレモンで仕上げる。

●パタタス・ブラバス

外はカリっと中はホクホクのポテトフライ。ぴりっと辛いブラバソースがアクセントになっている。

観光の合い間に小腹が空いたら気軽に「バル」に立ち寄ろう

スペインを訪れたら入ってみたいのが「バル」。生ハムやアヒージョ、オムレツをはじめタパスと呼ばれる小皿料理などどれもグレードが高い。観光の休憩に気軽に立ち寄ってビールやワインとともに楽しみたい。

1：バルはカジュアルな雰囲気で客同士の交流も楽しい。2：食材を串に刺して食べる「ピンチョス」。3：小皿料理を注文してワインと楽しむ。4：バルは街のいたるところにある。

真夏の パシフィック・ワールド号でゆく 日本一周クルーズへ

今夏、船旅をよりカジュアルに楽しめる日本一周ショートクルーズが出航する。夏休みを利用した19日間、北は宗谷岬沖から南は沖縄まで10カ所の寄港地をゆとりをもって巡る。そろそろどこかへ旅したい。そんな方々に日本の魅力再発見の船旅をおすすめしたい。

ピースボートクルーズではこの夏、4年ぶりの日本一周クルーズを発表。東北から旅はスタートし、まずはピースボートにとって震災の復興支援拠点としてゆかりの深い石巻へ寄港する。北海道では広大な湿原を擁する釧路、ノスタルジックな運河が魅力の小樽、歴史遺産の多い函館などを訪れる。その後は風情ある街並みが広がる古都・金沢や風光明媚な景観で知られる弓ケ浜半島に位置する境港を回り、九州一の観光都市・博多を経由して、韓国第二の都市・釜山、そして沖縄の那覇へ。また、クルーズならではの洋上からしか見られない景色が、心地よい夏空のもとで次々と展開される。

そしてクルーズ船が「パシフィック・ワールド号」であることも船旅をよりいっそう快適なものにしてくれる。さらに、今回「18歳未満無料キャンペーン」を実施中。ショートクルーズ限定のキャンペーンで、参加人数や予算に合わせて12タイプの船室から選ぶことができる。夏休みの思い出づくりに、ご家族、ご友人とピースボートクルーズへ！

釜山

境港

金沢

沖縄

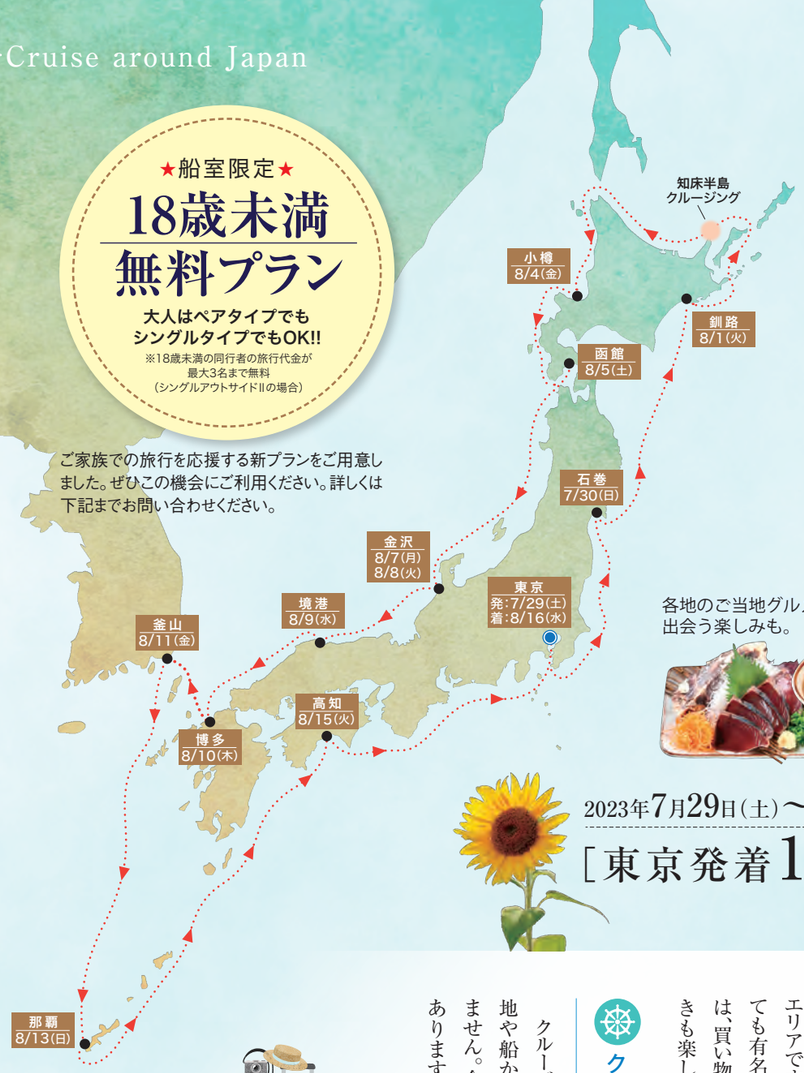
博多

高知

石巻

函館

小樽



各地のご当地グルメと出会う楽しみも。

2023年7月29日(土)〜8月16日(水)

［東京発着19日間］

★船室限定★
18歳未満 無料プラン
大人はペアタイプでも シングルタイプでもOK!!
※18歳未満の同行者の旅行代金が最大3名まで無料
(シングルアウトサイドⅡの場合)

ご家族での旅行を応援する新プランをご用意しました。ぜひこの機会にご利用ください。詳しくは下記までお問い合わせください。

クルーズディレクターに聞く 旅の楽しみが凝縮された日本を巡るクルーズへ

まだ知らない日本の魅力と船旅でしか見ることのできない景色に出会う旅へ。久しぶりに出航する日本一周クルーズの概要や楽しみ方を、クルーズディレクターに聞いた。

クルーズディレクター
田中 洋介

1978年東京生まれ。大学卒業後、添乗員として各地を訪問。2003年ピースボートクルーズに初乗船。2014年の第86回クルーズからはクルーズディレクターとして活躍。これまで世界一周クルーズには12回乗船している。

日本一周の船旅とはどんなクルーズでしょうか?

ピースボートクルーズとして初めて日本一周クルーズを実施したのは、1989年まで遡ります。当時は、「さんふらわあ7」という船で、東京・日立・青森・金沢・敦賀・唐津・宇和島・大阪に寄港しました。そして30年の時を経て、2019年に2回目の日本一周クルーズが開催され、今回は3回目となります。そんな日本一周クルーズの魅力は、世界一周の船旅では発着地となっている、「日本」を海から見てみようというところです。日本の魅力を再発見できるそんなクルーズになると思います。

おすすめの寄港地はどこでしょうか?

まずは石巻です。ここは東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地の一つで、NGOピースボートも震災直後から継続して支援活動をおこなってきたゆかりの深い場所です。また夏の北海道も見逃せません。自然の風景はもちろん、新鮮な海の幸やラーメン、ジンギスカンなどのグルメも楽しみですね。

そしてこのクルーズで唯一の海外は韓国の釜山です。世界一周の船旅の航路には入りにくい位置にありますが、短い期間でのショートクルーズでは必ずといってよいほど訪れる大変人気の寄港地です。中でも釜山タワーや国際市場など、観光やグルメ、ショッピングを楽しめる南浦洞(ナンポドン)は、人気を誇るエリアです。映画やドラマのロケ地としても有名な国際市場(クッチェンジャン)は、買い物だけでなく韓国料理の食べ歩きも楽しめる、にぎやかな場所です。

クルーズの魅力は?

クルーズのみどころは、もちろん寄港地や船から見える景色だけではありません。今回は19日間という日程ではありますが、ピースボートクルーズの醍醐味でもある「人との出会い」も楽しみの一つです。年齢も国籍も、生まれ育った環境も異なるさまざまな方との出会いは、私自身、毎回楽しみにしています。また、1泊や2泊のクルーズでは短いけれど、世界一周はちょっと長過ぎるという方にとって、19日間というのはもっとも適した日数かと思います。

パシフィック・ワールド号の魅力を教えてください

現在私たちがチャーターしている、「パシフィック・ワールド号」で日本一周クルーズを実施するというのも、注目のポイントです。総トン数77000トン、15階建てのこの船の4層吹き抜けのアトリウムやレストラン、ラウンジなどのパブリックスペースは、フィジカルディスタンスが十分に確保できる広々とした設計が特徴的です。

実は、このパシフィック・ワールド号はその前身時代の2013年に横浜発着の日本周遊クルーズを外国客船として初めて実施した経歴を持っているのです。まさに日本周遊クルーズの先駆け的な存在です。

普段は世界一周で使用しているピースボート史上最大の大きさを誇る外航客船で、日本近海を巡るクルーズに乗船できる。いつかは行きたい世界一周の船旅の体験クルーズとして乗船される方が多いのも特徴ですね。

最後に一言お願いします

最近は、海外から日本を訪れる観光客の姿も多くみられるようになりました。いよいよ旅が本格的にできる時が来たんだなと実感しています。久しぶりの旅行でどこに行こうか迷っている方、いま申し込みをしている世界一周クルーズの出発がまだ少し先の方、そんな方々には、まずこの日本一周クルーズで旅の再開をしていただきたいです。きっと「旅の素晴らしさ」を再認識する素敵な時間になるはずです。

まだ知らなかった
日本の魅力に出会う日本一周の船旅

お問い合わせ・資料のご請求は
［受付時間 11:00〜17:00 定休：土日祝］
0570-030-617
スマートフォンからかんたんにアクセス▶▶
ピースボート日本一周 検索

水先案内人が語る

ピースボートクルーズの魅力

「人と自然と異文化」をテーマに地球規模の環境・野外教育プログラムに取り組むNPO法人の代表である髙野孝子さんに、ピースボートクルーズでの体験や船旅の魅力などについて話を伺った。

自然活動家、NPO法人エコプラス代表理事、
早稲田大学教授、立教大学客員教授

髙野 孝子さん TAKANO Takako

野外・環境・持続可能性教育、分野横断的な環境学を専門とする。地球上各地での自らの遠征や少数民族との旅の経験をふまえ、90年代初めから「人と自然と異文化」をテーマに、地球規模の環境・野外教育プロジェクトの企画運営に取り組む。体験からの学びを重視し、「地域に根ざした教育」の重要性を提唱している。社会貢献活動に献身する女性7名に向けた「オメガアワード2002」を緒方貞子さんや吉永小百合さんらと共に受賞。2016年春期早稲田大学ティーチングアワード受賞、2017年ジャパンアウトドアリーダーズアワード（JOLA）特別賞。環境ドキュメンタリー映画「地球交響曲第7番」に出演。著書に『野外で変わる子どもたち』（情報センター出版局）ほか多数。

ピースボートクルーズの初乗船は2003年でしたね

そうですね、私は当時イギリスに住んでいたのですが、「ワールドスクール」という、若い人たちに学ぶ機会を提供する事業を行っていました。そんなところをピースボートが注目して水先案内人として招かれたのだと思います。もともと早稲田大学の学生だった頃、早稲田の先輩がピースボートを立ち上げたことを聞いて「すごく面白そう」という印象をもったことを覚えています。それから時間は経ちましたが、ご縁をいただきニュージーランドまで行って合流していろいろお話しさせていただきました。

そのときの印象はどのようなものでしたか

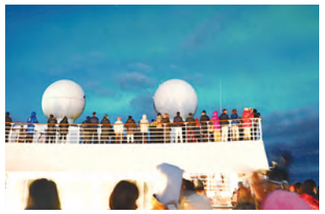
とても楽しかったですね。まずパワーに圧倒されました。いろいろなことが船内のあちこちで起きていて、最初はその様子を唖然と見ていたような記憶があります（笑）。自主企画がたくさんあって、準備や運営を乗船客が自らやる、というみんなが主役になって船旅をつくっているイメージでしょうか。中には社会的な目線や問題意識をもっている企画もあって、そういう点がとても興味深かったです。

2回目の乗船が2019年ですが1回目と違いはありましたか

以前よりはるかに大きな船になっていました。乗船客は倍くらいになっていたのでしょうか。スタッフのサービスもとてもきめ細やかで、ちょっと例えが上手くないかも知れませんが、アングラの学生演劇の集団っぽさがなくなって、洗練されたクルーズ船に成長した、という印象がありました。私が関心をもっていたのは、ピースボートが設立当初からの「船旅を通じて、人と人のつながりをつくり、国同士の利害関係を超えた平和文化の構築を目指す」という理念をもち続けているか、ということでした。嬉しかったのは、その理念だけではなくパワフルさ、行動力が初めて出会った頃からまったく変わっていなかったこと。若いスタッフ、多くのボランティア、そして参加者の皆さんのエネルギー、熱い想いを感じました。

2回目のクルーズで観光での思い出はありますか

カナダからレイキャビクまで乗船しましたが、カナダでは紅葉のメッカといわれるセント・ローレンス川の航行が素晴らしかったです。川とは思えないくらいに雄大で、デッキから見飽きることのない風景が続いていましたね。そこから大西洋に出て、どんどん寒くなっていきましたが、アイスランドではしっかりオーロラを見ることができました。船内でオーロラの出現を待つ間の放送とか、期待感を盛り上げる演出もいいですよね（笑）。それまで私は地上からオーロラを見たことはありましたが、船上からのオーロラは格別でした。また1000人と一緒に見る一体感も忘れられません。まだ見たことのない方には絶対おすすめです。自然の美しさから感じるものはそれぞれの感性で違うと思いますが、想像力をかき立てられますね。



船旅の魅力はどんなところにあるとお考えですか

私がいいな、と思うのはボーッとできること。たとえばデッキで海を見ていると静かな気持ちになって、瞑想のような感じでいろいろなことをとりとめもなく考えられます。何の障害物もない大海原の只中で、いま自分がここにいること、海の中にたくさんの生きものがいること、太陽の光を浴びたり満天に輝く星を見つめながら地球という星に生きている自分を感じられるのも好きです。また、飛行機は目的地へピンポイントで辿り着きますが、船旅は長く洋上を進みながら目的とする陸地が目に入り、港に入っていく過程は特別ですよね。着岸すると目の前に異国の街が広がっている、あの高揚感といったものは船旅ならではのものだと思います。

北極、南極によく行かれていますが極地の魅力はどこにありますか

極地の魅力は、日常とはまったくかけ離れた世界にふれるということだと思います。海が凍ってしまったり、まつ毛が凍ってしまったりという非日常感、そして空気の乾燥度、見渡す限り草木もなく広がる大地、あるいは白夜、そういう自然がつくった極限の世界を体験できることでしょうか。

代表を務めている「NPO法人エコプラス」の活動について教えてください

エコプラスは任意団体として活動を開始したのが1992年で、昨年30周年を迎えました。青少年の自然体験事業、地球的な視野での環境教育プログラムなどを通して、多様な人たちとともに自然と関わりながら「豊かさ」や「幸せ」の本質を問い直し、その価値観をもって社会に関わる人づくりを目指しています。こうした活動によって平和で豊かな世界に近づくことをミッションとして掲げています。キーワードは「人」「自然」「異文化」ですが、これらは時代とともにますます重要になってきていると感じています。テーマとしてはピースボートと共通する部分がありますね。

コロナ禍における3年間で活動にどのような変化が生じましたか

海外での活動や海外から人を受け入れての活動は一旦停止しました。コロナ禍の3年間で、取り巻く環境も変わりました。私たちは地域の方々の経験や知恵から学ぶことを大事にしていますが、支援していただく方も3つ年齢を重ね、今まで通りにやることが困難な場合があります。農作業やキャンプなどは再開できるのですが、もう一歩進んだ、地域の暮らしにふれて深い学びにつなげることで、消費者としての自分とは違う見方ができるようにしていきたい。そういう最も大切な部分に触れ、体験するためには新しい仕掛けが必要で、それをつくっていくのは難しいのですが、やっていかなくてはと思っています。

国外に出られなかった長い期間を経て、改めて旅や海外に行く意味をどう捉えていますか

海外に出ることの大切さをますます実感しました。今までは当たり前と思って出ていたわけですが、普段と異なる光景に身を置き、いろいろな人と話をすることのありがたさや素晴らしさを改めて感じます。去年は久しぶりにアラスカとイギリスに行き、昔の知人たちと再会できました。会えて嬉しかったことはもちろん、その場所での暮らしを愛おしく思えました。これからの旅は、よりその目的を意識して出かけるようになる気がしています。またいろいろな面で世界は変わったことも実感し、この世界で自分はこれから何をしていくべきかを考えることもできました。

ピースボートクルーズで訪れたい場所はありますか

私は多くの国に行っているようにみえるかもしれませんが、結構極地が多いので、実はあまり行けていないんです（笑）。パッと思い浮かぶのは、「すごくいいよ」と聞かされているイースター島は一度訪ねてみたいですね。またアフリカもマダカスカルとモロッコにしか行ったことがないので、ナミビアのナミブ砂漠や南アフリカのケープタウンなども行ってみたいです。また機会があればぜひ乗船させてください。

最後にこれから乗船予定の方へメッセージをお願いします

すでに申込みをしてピースボートクルーズに出かけることが決まっている方々は幸運だと思います。やはりほかではできない体験が待っているので、その機会を目一杯活かしていただきたい。気持ちが向くままにいろいろなことにチャレンジし、たくさんの友だちをつくっていくことで、船を下りた後の世界も変わっていくと思います。

また、ピースボートを経験したら、価値観や世界観が大きく変わると思います。100日間にわたって見たもの感じたものは、その後の生き方に大きく影響すると思いますし、世界は多様だということを全身で理解して生きていくことになると思います。エコプラスの活動も同じなのですが、その考え方や生き方は周囲の人にも影響を与えていきます。

ピースボートクルーズに行こうと思った時点ですでにチャンスは手の中にありますから、それをしっかり掴んで欲しい。チャンスは掴めるときにつかむことが肝心です。⚓

自然、異文化、地域社会をテーマとした体験や学びを重視しているECOPLUSの活動詳細はコチラ。

未曾有の大地震 生活を取り戻すためのサポートを

トルコ・シリア大地震緊急支援
ピースボート災害支援センター活動報告

2月6日、トルコ・シリア国境近くでマグニチュード7.8の地震が発生。広範囲で建物が倒壊するなど大規模な被害があった。5万人以上が亡くなり、数十万人が家を失い、避難所生活を続けている人も多い。ピースボート災害支援センター（PBV）は2月末よりスタッフ2人を派遣し初動支援を行なった。

PBV ピースボート災害支援センター　ピースボート災害支援センター
［オフィシャルサイト］https://pbv.or.jp/

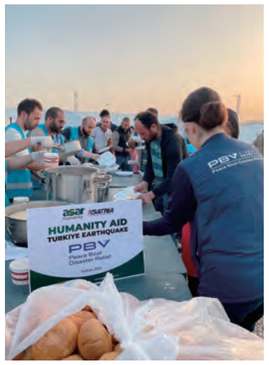
PBVスタッフは今回、インドネシアのNGO「ASAR Humanity」のコーディネートで、トルコのイスタンブールから同国南部のアダナへ向かった。ASAR Humanityは昨年のインドネシア地震において連携した縁で現地での協力を快諾してくれた。アダナを拠点に調査と支援を行なったのはハタイ県。派遣スタッフの一人、鈴木郁乃さんは街の様子を次のように語る。

「トルコでは10県にまたがり被災しましたが、ハタイ県の被害はそのなかでも大きなほうです。幹線道路の多くの建物、住宅や商業ビルが倒れていて、下層階が潰れている建物で上層階から家財道具を持ち出している姿が見られました。多くの人がテント生活を送っていましたが、国内では余震が続いていたので二次災害の恐怖もありました」。

現地ではまずOvakentという街でハンドソープ、ゴミ袋、トイレットペーパーなど衛生用品や寝袋、ソーラーランタンなど支援物資を配布。またほかの支援団体とともに約2500食分（PBV支援分は450食）の炊き出しを提供した。またウズベキスタンや中央アジアからの移民の方々が暮らすコミュニティにも支援物資を届けに行った。その様子を鈴木さんは「こちらは一軒家や低層階が多く、庭でテント生活をされていたり、テント村で生活をされていました。日中はまだ暖かくなりますが朝晩は冷え込むので健康面も心配です。給水所やトイレの数も限られ衛生状態の改善も必要で、この生活が続くことで精神的にかなり不安定になることが懸念されました」と振り返る。

トルコは国がコンテナハウスを供給し始めているが、すべての避難者が入居できるのはまだ先のことになるだろう。瓦礫の処分も復興へ向けた課題になっている。現在、日本をはじめ世界中の支援団体が活動しているが、初動支援だけではなく中長期的な支援が必要だ。時期に応じてニーズも変わっていくので、そこを見きわめてフォローしていくことが支援団体に求められる。また、もちろん多くの人が関心をもち続けることが大切だ。今後の支援へ向けての考えを鈴木さんは次のように語ってくれた。

「被災者の皆さんが1日も早くテント生活などから違う場所に移り、生活を取り戻すお手伝いをしていきたい。現地のNGOと連絡を取り合っていますが、私たちの得意分野である、人を支えていくこと、ソフト面の支援、たとえば子どもの遊ぶスペースの設置や精神面のケアなどのニーズに対応していきたいと考えています。また国際機関やトルコのNGOも報告書を出しているので、現地の最新情報ともすり合わせながら、取り残されそうなニーズをフォローしていければと思っています」。



いま、皆さまからのご支援を必要としています

PBVでは緊急支援募金のほかYahoo!ネット募金やReadyForなど各種サイトでも募金を実施しています。街頭募金は全国各地のピースボートセンターが中心となって実施。東京、横浜、名古屋、大阪、福岡などで道行く人々やボランティアの皆さまなどからたくさんの支援とあたたかな声援をいただいています。現地の人々が安全な暮らしと笑顔を1日でも早く取り戻せるよう、皆さまのあたたかいご支援をお願いいたします。

2023年トルコ・シリア大地震緊急支援募金 あたたかいご支援をお願いします

募金方法
●郵便振替 ●銀行振込 ●クレジットカード
●yahoo!ネット募金 ●携帯料金といっしょに寄付する

お気軽にお問い合わせください　TEL.03-3363-7967 11:00〜16:00 土日祝定休

3年ぶりのピースボートクルーズ出航式

4月7日、ピースボートクルーズが3年ぶりに横浜港から出航した。約1400名を乗せた新チャーター船パシフィック・ワールド号によるコロナ後初の日本発着の世界一周クルーズ。いざ22寄港地、108日間の船旅へ。待ちに待った再開に、横浜港大さん橋には乗船者と見送りの人たちの熱い想いが満ちあふれた。

乗船者の家族、友人、過去の乗船者、ピースボートスタッフなど大勢が世界一周の出航を祝い、見送った。

©Social Good Photography, Inc.

ピースボート共同代表吉岡達也と名誉船長ビクター・アリモフさんが、ピースボートが平和の使者であることを世界に示していくことを改めて表明。

コロナ禍を乗り越えての3年ぶりの出航はひときわ感慨深いものとなった。

神戸港でも出航式を開催

パシフィック・ワールド号は、横浜港を出航した後に神戸へ向かい、神戸港発の乗船者を迎え入れ、その夜に横浜同様に盛大な出航式を開いた。「3カ月後、笑顔でお会いしましょう！行ってきます！」と夜の海をゆっくりと進み、日本から旅立っていった。

4月7日、午後12時20分、横浜港大さん橋国際客船ターミナルに司会者の声が響いた。「ただいまよりピースボート地球一周の船旅、出航式を始めます！」。巨大なパシフィック・ワールド号のデッキに集まった大勢の乗船者とスタッフ、そして見送りのため大さん橋の屋上広場に集まった数百人から、大きな歓声と拍手が湧き上がった。皆が3年ぶりのこの瞬間を待ち望んでいた。クルーズディレクターの田村美和子が出航を迎えた喜びと3年間における多くのご支援、ご協力に感謝を述べた後、ピースボート共同代表吉岡達也が挨拶に立った。

「本当に感動しています！ピースボートは40周年を迎えましたが、ひとえに皆さまのおかげです。改めてありがとうございます。この3年間苦しい時間が流れましたが、この船が出ることがコロナの夜明けだということを、日本そして世界中に示したいと思います」。

続いて名誉船長として乗船するウクライナ出身のビクター・アリモフさんが挨拶。今クルーズではウクライナ避難民への支援も予定されている。「皆さまのウクライナへのサポートに心より御礼申し上げます。これからも力を合わせてより平和な世界を一緒につくりあげていくことをミッションとして出航します。ピースボート、フォーエバー！」

全員での記念撮影の後、いよいよ離岸。出航のドラの音と汽笛が鳴る。「行ってらっしゃい！」「行ってきます！」のエールの交換が響くなか、パシフィック・ワールド号は悠々と大海原へ乗り出していった。ピースボートクルーズ、いよいよ再開。40周年という節目の年からまたピースボートは船旅を通して、人と人とのつながりを結び直し、顔の見える国際交流を図り、平和のメッセージを届け続けていく。

グローバル ヴォヤージュ 2023 Spring 2023年4月28日発行 編集発行人:井上 直 発行所:株式会社ジャパングレイス 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-32-13-2F TEL.03-5287-3081

船上百景［出航日］

船が離岸した後も互いに姿が見えなくなるまで手を振り出航を祝う。

感動の出航式を終えて さあ、世界一周の始まりだ

ピースボートクルーズ出航日、それは待ちに待った特別な一日だ。当日はターミナルで受付をして出国審査を受ける。船内に入ると、乗船者ならびにスタッフは国際色豊か。さまざまな言語が飛び交い、ここで旅の始まりを実感できるかもしれない。自身の船室を確認したら、ぜひ出航式へ。これはピースボートスタッフが「何回見ても飽きない」というほど、毎回感動ものセレモニー。デッキから見えるのは、見送りにかけつけた人、人、人。アトラクションや挨拶が続き、いざ出航へ。デッキから皆で「行ってきまーす！」、見送りの人たちから「行ってらっしゃーい！」。互いの姿が小さくなるまで手を振り、声を出す。船の出航は旅に出る人と見送る人が「顔」を見ながら最後まで挨拶を交わせるため、余韻が残るところが良い。船が港を出ると見渡す限りの海原。さあ、素晴らしい出会いと体験が待っている世界一周の旅の始まりだ。

大勢の人が見送りにくるのもピースボートクルーズの出航式の特徴。

世界一周への旅立ちに毎回、心動かされる。

編集後記

船に乗るたびに、頭に流れる歌があります。中島みゆきさんの名曲「糸」です。「縦の糸はあなた　横の糸は私　織りなす布はいつか誰かを暖めうるかもしれない」という一節が、船旅での出会いといつもリンクします。ピースボートは人と人とをつなげる船です。

このことを、先日の出航の時ほど実感した日はないかもしれません。4月7日の横浜大さん橋の港では、出発する人とのつながりはもちろん、見送りに来ている人同士の懐かしい再会もあふれていて、今まで紡いできたつながりをたくさん見ることができました。皆で待ちわびた出航をお祝いすることができ、感無量な時間となりました。

ウクライナ出身のアリモフ船長は、「この一年、日本の皆さんから多くの励ましの連絡をいただいた。ウクライナを忘れていないというメッセージがどんなに大きな支えになったか」と目を潤ませて感謝を述べていました。

この3年間、世界各地で発生した「分断」という不穏な空気に断ち切られてしまった糸も多いかもしれません。でも、あきらめずにもう一度糸を紡ぎなおす船旅が再開しました。この先に、誰かを暖める未来があると信じて、今日も船は進んでまいります。（M・H）

PHOTO：PEACEBOAT, PBV, Kazashito Nakamura, shutterstock.com, Adobe Stock, Getty Images